

雑 報

編集後記

○編集幹事会

日時 平成8年2月5日(月)午後4時より
 場所 消化器病センター2階 カンファレンスルーム
 議題 東京女子医科大学雑誌66巻5号査読結果審議, その他

○集会幹事会

日時 平成8年2月27日(火)午後4時より
 場所 弥生記念講堂地下D会議室
 議題 第306, 307, 308回例会, 第62回総会その他について

今年も退任教授の最終講義が3月2日に弥生記念講堂において開催されました。講義内容は先生方が生涯をかけられた研究成果の一端を短い講義時間の中に濃縮されてお話をいただきました。2階席まで埋め尽くした聴衆の1人として感銘深く聴講させていただきました。先生方に共通していることは若々しく生気に溢れており、情熱を傾けるお仕事を持ち続けることの意義をもお教えいただいたようにも思いました。

さて、本学会誌の編集幹事を委嘱されて長い年月が経ちました。この間、常に自問自答し、結論の出せない点があります。通常の雑誌では企画を立て、執筆者を決めるというような仕事が主になるかと思われませんが、本誌の性質上投稿原稿を査読し、採否をきめることが中心的な仕事となります。この査読の段階でどこまで立ち入ることが許されるのか。論文はしかるべき立場の指導者の下で作成されたものであります。査読者は指導者ではありません。その内容について容喙は許されないと考えます。その論文が投稿規程に則ったものであるか否かを判断し、論文の構成や表現方法、論理の進め方、結論の導き方が妥当かなどをチェックしなければなりません。科学論文であるためには正確な表現を優先させるべきは当然であります。冗漫な、或いは曖昧な表現、不必要な重複などのみられるものもあることも事実です。とくに題名はその論文の顔であり、短い文言で内容を的確に表現することは至難のわざであります。俳句を作るようなつもりで大いに苦吟して頂きたいと思えます。

また、最近本学会誌に対する投稿数が減少傾向にあるような印象を受けます。それは専門分野が細分化し、それぞれが学会を持ち専門誌を発行するようになったことの影響かとも考えられます。このような趨勢の中で、全分野をカバーするような学会誌の在り方を再検討する必要があるのではなかろうか。

(1996. 2, A.Y.)